

「考える音楽科」のアウトプット

音楽科における「音楽創作」と体育科における「身体表現」の合科連続授業実践から

東海大学付属静岡翔洋小学校

教諭 塚本 伸一

【本実践の経緯】

2019年8月の実践発表において、次のような示唆を受けた。

- ① 他教科、特に体育科との合科授業についての実践例を研究することで、表現することの重要性を示すことが出来るのではないか。
- ② 考える音楽科で示された「気持ちや思い」を具体的な表現活動として取り組むことは、教科の垣根を超えた合科的実践として価値があるのではないか。

これらを熟考し、具体的な合科授業を模索した結果、音楽づくり（音楽科）と身体表現（体育科）を結びつけることが一つの解答であることを明らかにしたい。

【小学校における合科授業について】

わが国では従来から生活科を中心とした合科授業が散見されている。今回の音楽科と体育科による合科連続授業では、学習指導要領に示された以下の項目から、実践の相乗効果が予想される（筆者による要約）。

（音楽科）

- ・音楽表現についての創意工夫や、「思いや意図をもって表現」すること

（体育科）

- ・楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、「表したい感じを表現」したり踊りで交流したりすること

また、小学校における明確なる教科独立のカリキュラムは、児童の柔軟な想像や発想には好ましくないのではないかと、という見解¹があり、本合科授業は、教科指導上の狙いを効果的に実現することが出来る指導方法であると確信している。

また、この形態は筆者が実践している「考える音楽科」と合致し、「気持ちや思い」をどのように表現活動に結び付けていくかという課題に導くことが出来る。

【対象学年と実施時数等】

- ・学 年：5年1組20名（男11・女9）
- ・時 数：音楽2時間+体育2時間
- ・題材名：「気持ちや思い」を込めた音楽に合わせて身体表現をしよう

【音楽づくりの授業より】

①学習指導要領より（論拠）

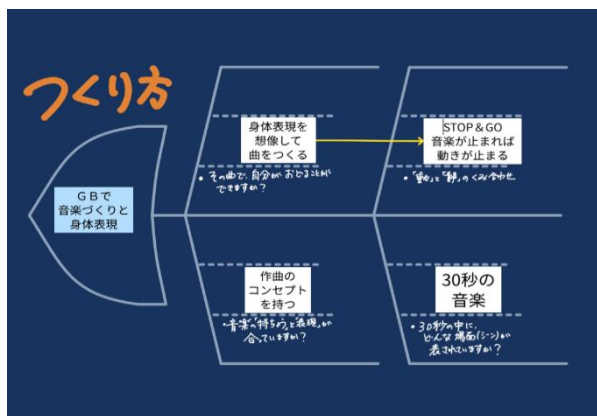
音楽科授業において、「知覚・感受したことを体の動きで表す」ことは、音楽によって喚起されるイメージや気持ちの変化に気づかせることができる。これは、主体的な学びの視点からの指導が可能であることを示している。

特に、2内容A表現(3)(イ)では、「音と音楽へと構成することを通して、どのように全体のまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図をもつこと」と示されている。つまり、体育科で行う身体表現を念頭にICT機器を活用して音楽づくりを行うことは、自らが構想した全体像を反映させやすいのではないか、という仮説を立てることができる。

②音楽制作とその条件等

- ・機器：iPad アプリ GarageBand
- ・条件：a) 身体表現を念頭に、30秒程度の音楽をつくる。
b) 動作と音楽を合わせるようにする。

¹ 安彦忠彦(2009)「学校教育における『教科』の本質と役割」『学校教育研究24巻』を参照されたい。



(図1：児童に提示した設計基本図)

思考ツールの一つである「フィッシュボーン図」を使って、4つの条件を児童に示した。

(身体表現を想像して曲を作る) (作品のコンセプトを持つ) (STOP&GO 音楽が止まれば動きが止まる) (30秒の音楽)

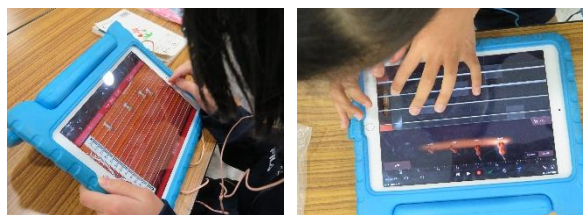
ここでは教師からの指示として4つを提示するだけに留まった。それは、使用したアプリ

「GarageBand (以下GB)」は、記譜上のさまざまな制約等を知らなくても、使用者が感覚的に音楽制作できる点が今回採用の理由でもあり、当該児童たちはこれまでも使用経験があり、操作上の説明等が不要だったため、スムーズな活動が期待されると考えたためである。

③授業のながれ

- 1) 設計図を示す (図1)
- 2) 音楽の三要素の使い方 (以下に説明)
- 3) 各自創作活動 (図2)
- 4) 作品を教師に提出 (図3)

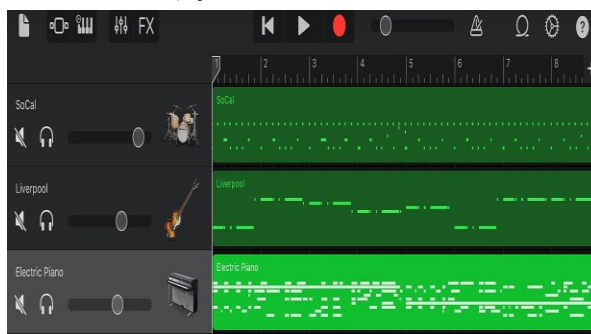
2) 音楽の三要素の使い方では、既習内容である「リズム・メロディー・ハーモニー」のうち、どれを用いて作品を作るかについて説明をした。小学校音楽科において、多くは3つの要素がすべて含まれている楽曲が多く提示されている。しかし、日本の伝統音楽や世界の音楽の中には、リズムとメロディーだけで構成されているものや、リズムだけで作られているものがあることを再度指導した。それによって音楽を形作っているものの中で、リズムを第一に作成することを理解できたようである。しかし、そのリズムを敢えて外してメロディーだけで作った児童もいて、多様な創作活動が展開された。記譜という制約をなくし、直感的に音楽を創作することが許された本授業における効果の一つであると考えている。



(図2：音楽創作の様子)

多くの児童がリズムボックス (ドット図) を使用して音楽創作を行う姿がみられた。この利点として、一定のリズム反復が実現され、安定したダンスを行うための基礎となりうる。それに加えて児童の多くが追加や削減によって、STOP&GOを実現するためのリズム創作を行っていた。

また、箏によって和風の雰囲気醸成する姿や、ベース音を使用して安定した楽曲に仕上げようとする姿も散見された。主体的な活動例として示すことができよう。



(図3：完成した作品例)

このようにGBは録音ボタンを押すと各パートはドット図として示される。図3では、1段目にリズムを作り、2段目はベースを使ったハーモニー、3段目はピアノを用いてメロディーを作っている。この児童の創作は、前述の音楽の三要素をすべて盛り込んでいることが分かる。他児童の多くも3パート編成で検索するものが多かった。そして、「3つのパートを使うことは、従来から耳なじみのある音楽に似ているから、普通に使った」と児童への聴取によって明らかになった。つまり、

西洋音楽の様式や形式が刷り込まれていることが示唆された。それ以外の児童の中には、メロディーだけで創作した者がいた。和楽器である箏の音色で作った者、二胡やチャイナドラムを多用した者など、西洋音楽にとらわれない児童もいたことは、次時の体育科における発表会後の批評活動に期待したいと考えた。

【身体表現活動の授業より】

①音楽科から体育科への連続性

GBで創作した音楽は、自分の思いや意図が十分に盛り込まれたものである。体育科学習指導要領の5・6年生F(1)アには、「特徴を捉え」、「表したい感じ」をひと流れの動きで「即興的に」踊ると示されている（括弧は筆者による加筆）。

即興的という表記は、表現の分野では直感からその場の雰囲気等に合わせて変化させることを示している。そして、自作曲で臨む今回の身体表現活動は、自分の意図でコントロールされた音楽であり、まさに「創作」の名にふさわしい題材になりうると確信した。

②授業のながれ

- 1) 1人1台のiPadで練習
- 2) 適宜他者に見てもらい、アドバイスを受ける
- 3) 発表会（図4）
- 4) 自己評価と他者評価（表1・2 PMIシート）

1)では20分程度を確保し、GBを再生しながら身体表現の練習を行った。十分検討して創作した音楽だったはずが、実際の振り付けを行ううちに修正したいという気持ちが生え、体育科の授業中であつたが音楽の修正を図った児童がいた。今回は特に注意することはなかったが、このような展開が起こりうることを想定しておく必要があつた。

③発表と評価活動

（図4：発表会より）
（女子児童）



（男子児童1）



（男子児童2）



発表を鑑賞中、PMIシートを利用して互いを評価する活動を展開し、音楽創作から身体表現につなげるための工夫点等を記述させた。

（表1：身体表現後の自己評価より）

Plus （工夫点）	Minus （改善点）	Interesting （面白かった点）
<ul style="list-style-type: none"> ・手拍子をあわせるところ ・短時間で仕上げたこと ・リズムに正確に合わせた ・止まらずにできたこと ・同じ動作にならないようにしたこと ・笑顔を絶やさなかったこと ・曲に合わせて跳ねたこと ・リピートしたこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・恥ずかしがった ・内容が薄い ・同じ動きになった ・複雑な動きをつけなかった ・キメのポーズが決まらなかった ・小さな動きになったこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・ストーリー通りに踊れたこと ・手をグルグルして勢いをつけた ・ロボットみたいな動き

(表 2：身体表現後の他者評価より)

Plus (工夫点)	Minus (改善点)	Interesting (面白かった点)
<ul style="list-style-type: none"> ・曲とダンスが合っていた ・常に笑顔 ・ボディパーカッションを使っていた ・手拍子が多かった ・みんなを巻き込んでいた ・恥を捨てていた ・左右均等に動く人が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・男子の方が最後まで踊り切っていた ・恥ずかしがらず ・ただ立っているだけ ・同じ動きが多い ・ブレイクダンスになっていない ・手拍子ばかりに人がいた 	<ul style="list-style-type: none"> ・親の前でやらせられそうなダンス ・ラーメンを食べるようなダンス ・細かなステップ ・シンプルな音楽に派手な動き

【結果と今後の方向性】

①音楽科からの視点

音楽科(2時間扱い)では、iPad操作を熟知している学年だったため、導入部での操作説明が不必要だった。GBを円滑に操作するまでには、それまでの授業内でさまざまな取り組みを行ってきたことが功を奏している。例えば、二部合唱や三部合唱の練習時、別々の音源トラックにメロディーを録音し、同時再生機能で自分の声部に対して反復練習を行ったりしたことである。この操作では、基礎的な機械操作学習を1時間程度かけて行ってきたので、十分に理解している児童ばかりである。仮に理解ができない者がいても4人程度のグループで活動を行うため、相互に教え合ったり学び合う姿が見られるため、教師による一斉指導は不要となる。

今回は体育科授業内で音楽を再構成する児童がいたことを踏まえ、音楽科授業内で完成した作品を他者に聞いてもらって評価を受けることが必要だったと認識している。構成力に乏しい作品に対して、複数人の意見で改善されることが期待できるとともに、授業内フィードバックを展開すれば教師からのアドバイスができたことが挙げられる。

また、音楽を形づくるものに対して意図的に選択させる活動(三要素のどれを使用するか)は、児童の主体的な学びへの一助となりうることが示されたことから、創作活動時での教師による評価

等は必要ないと考えている。そして今後の音楽授業内では、さまざまな楽曲分析を展開する際に、三要素を中心とした構造的な学びが期待される。中学校で学習する「三部形式」「ソナタ形式」など理論が複雑なものほど、楽曲分析する力が発揮されると考えられる点も、主体的な学びから獲得された効果の一つであろう。

②体育科からの視点

通常の身体表現活動では、クラス全体や少人数グループでの展開がほとんどで、今回のような個人的活動は稀である、しかし、自己表現を極めていく中でさまざまな選択に迷うことがある。その際に仲間と協働して学び合うことができたことは、個別の取り組みでも協働することが可能であることを学ぶ機会となり、さらには表現の質向上に効果があったと推察される。

今後は、4人グループを1単位として15秒程度の楽曲をつなぎ合わせ、ストーリー性のある構成を行わせてグループによる身体表現につなげていくことが必要である。そのためには、ストーリーの起承転結が求められることから、文章校正の力(国語科)やコンテ図作成(図工科)といった複数の教科横断型授業が可能となる。

【おわりに】

本授業は、音楽科2時間・体育科2時間扱いで行った。これらは「創り上げる」ことが共通項であり、考えたこと(思考)を身体で表す(表現)活動を通して、児童がどのようなプロセスを経て主体的かつ対話的な学びにつなげていくことができるか、という問題について検討する機会となった。合科連続授業は教員にとってはさまざまな制約が伴って現場では困難を要することが多いが、視点を変えると、児童にとっての学びには全く壁がないのが事実であることを再認識し、児童中心の授業づくりを積極的に展開することが、これからの学校教育に必要なことであると確信した。